

「おいそっちは生活安全課の持ち場だろ？」

「すみませんお祭りで人手が足りないのはこっちも同じで…」

「まーまー、どっちも辛いんだから。とりあえず給水でもして落ち着いてから考えるべきっしょ？」

「はあ、まあ副局長がいうなら…」

そういえばこういったス.S.P.D.:Kivotos Student Police Department ことヴァルキューレ警察学校の職務をし
っかり見ることは初めてだったなと、『先生』と呼ばれる男性は考えていた。目の前では何人ものヴァルキュー
ーレ警察学校の生徒…といっても実際の治安維持任務にあたっている警察でもある少女たちがせわしなく動
き回っている。

そして彼が座る横に腰かけて不動の姿勢でいる女性、公安局長の尾刃カンナに視線を向ける。17歳にして
公安局長という重責を担う彼女は今も落ち着いた様子でモニターに映し出されるさまざまな事象に目を向け
て、静かにマイクを取った。

「現本（げんぼん。現場本部のこと）から第3」

『…第3業務地区ですどうぞ』

「通報が入っている。業務地区イイヤマ3-25、カイザーセキュリティのイイヤマ出張事務所からだ。最寄
りのPB（交番のこと）からお願います。おそらく粋がったスケバンが群衆誘導に当たっていた警備員を挑発
したものと思料（思いはかること）されるが、事件事故等詳細が判然としない。必要とあらば第3の判断で専

務（刑事のこと）を派遣するように」

『第3了解』

それだけやり取りするとカンナはマイクを切り、またモニターに注意を払う。そこには現在の生活安全局と公安局の生徒たちの配置が地図に映し出されており、現在の群衆の概数が表示されていた。

「現本よりドローン課」

『はい、こちらドローン課です』

「現下（現在のこと）の監視体制を維持。雑踏動態と群衆密度の把握を厳とせよ」

『ドローン課了解』

通信を終えると彼女はモニターを何度か指差し確認をして…

「続けてD」シラトリ各所、所定の配置を確認する。シラトリ支所」

『シラトリ支所完了』

「コーギータウン」

『…』

「コーギータウン」

『……はっはい、コーギータウンも完了です！』

「では次。トライスクエア」

『トライスクエア完了だよお』

「…先般の天気予報により本日は時刻にかけて気温が大幅に上昇すると思料される。殊に雑踏整理は群衆の中で実際以上の体感温度となる。市民だけでなく、当該局員もその点留意し給水は欠かさぬように」

『シラトリ了解』『コーギータウン了解です』『トライスクエア了解』

マイクを下ろして小さくため息をつくカンナを見つめ、彼女がどれだけ大きな責任を負って職務を遂行しているかを先生も強く感じた。

今日は〇〇シラトリ区のお祭りの日。

「はい皆さんロープに従って歩いてくださーい！」

「露店で買い物をする方以外は立ち止まらないでね〜」

「無理やり前にも進まないでください！将棋倒しの恐れがありますッ！」

「お、姐様型抜きッスよ。懐かしいなあ」

「まあ素敵！私こういうの得意なんですのよ」

「マジっすか！じゃあやってみます？」

「へえ、意外っすねえ…」

この現場本部が面している大通りだけですら、多くの人々が混じって混沌とした状況なのが嫌というほど分かる。

他の学園からも多くの観光客が出店や花火大会が行われるこの群衆の中でテロやトラブルが起きて市民が巻き込まれることだけは避けなければならない。今日は一段といかめしい表情をしているなと思ったが、ここで茶化すわけにもいかず、彼は隣で静かにしていることしかできない。

『こ、コーギー1から現本！』

「コーギー1どうぞ」

『現在、朝焼け坂歩道橋の滞留にて若干名の倦怠感、胸のつかえを訴える男女がいるとの通報！』

「コーギー1、朝焼け坂歩道橋は朝焼け大橋駅方面への片側通行規制を措置している。現下においては逐次歩道橋への入場を規制し、群衆を遅滞させることで滞留の解消に努めるように。しかる後に歩道橋上で気分が悪くなった者等の把握にあたれ」

『りよ、了解しました！』

おそらくあの声は中務キリノだろう。

市民のために働くことを生きがいとしている彼女なら本来はすぐにでも歩道橋の群衆をかきわけて進みたいのだろうが、そこにくぎを刺すのも忘れないのはさすがだなと先生は見つめながら、その冷静さこそ彼女の能力の高さなのだ改めて感心していた。

その後、一時間ほど経過した頃、

「現本から各局。特に雑踏配備の多い各PSS（警察署のこと）においては速やかに給水要員を派遣し、現場（げんじょう。現場のこと）の局員の体調管理を図るよう。市民の安全第一は当然だが、そのためには各位の体調にも意を配るよう」

そういつて自分も備えられていたペットボトルの水をポータブル冷蔵庫から取り出すと、隣にいる先生にま
ず差し出す。

「どうぞ。先生もお飲みください」

「ありがとう。でも私はまだ…」

「我々が飲むことで局員たちが飲みやすくなるのです」

「わかった、それじゃあいただくね」

ならば遠慮する理由はない。彼はキュッとボトルをひねると、その手に冷たい心地よさが伝わってきた。

——それはまるで、カンナという人のようだ。
そう心の中でつぶやいて、彼はボトルを傾けた。

「お疲れさまでした先生」

「お疲れ様、カンナ」

といつても私は何もしてないけれどと彼が苦笑すると、カンナは小さく首を振った。

「………何かが起きてても先生がいる。それだけで非常に心強いものですよ」

「そうかな、それなら私もうれしいけれど」

「はい、そうです。ですから……」

——あとでお礼をさせてください。
そう彼女は耳元でささやいた。

〇〇シラトリ区でお祭りが行われたその夜更け、百鬼夜行連合学院の小さなお祭りにふたりは来ていた。

「お待ちせしました」

「あ、カンナ……………」

神社の入り口でかけられた声に振り返った先生は、思わず言葉を失ってしまう。

「その…こういう服装はあまりしないので…いかがでしょうか…」

恥ずかしそうに視線をそらして先生の前に立つ彼女の手を取って、彼は口を開いた。

「カナナ」

「は、はい…」

「……………パーフェクトだよ、パーフェクト！」

「それで、しょうか？」

まるで子供の用にとった手をぶんぶんと振る先生の態度に、カナナはだいぶ困惑した様子。けれども褒められたこと自体は悪い気がしないらしい。頬を赤く染めて先生の隣に立つ。

「では行きましょうか」

「うん、そうだね」

先ほど取った手はまだ離していない。まるで少年と少女に戻ったかのような気恥ずかしさを互いに抱えたまま、ふたりの姿は参道に消えていった。

「さあお祭りを楽しもうか」

「楽しむはず、だったんだけどなあ…」

「どうしましたか？先生」

参道を入れてすぐの露店でチョコバナナを買ったカンナは、先生の手を引いてすぐに境内の裏手にある茂みへと進んでしまった。そこにはいくつか木々に埋もれたベンチがあり、ふたりはそのひとつの前で立ち止まる。今から何が行われようとしているのか、分からないはずもない。

「いや、私もその気だったけどもう少し情緒というものを…」

そうぶつくさいう先生から離れ、カンナはベンチに腰掛けると、浴衣に手をかけ…

「……………ッ!？」

「おや、どうしましたか？」

浴衣の胸元を大きく広げたカンナは先ほど買ったチョコバナナを先生に見せつけるように舐め回し、その溶けたチョコレートが胸元にかかる。

カンナの豊満で白いバストにかかるその色は美しいコントラストというよりも、どこことなく彼女を汚すような背徳な色彩を帯びている。

それを知ってか知らずか、カンナは欲情した視線を先生へと向けた。

「ん…あむう…れろっん…美味しいですよ…これ」

「こら、カンナ…大人をからかうような真似は」

「おやこんなときだけ大人らしさを振りかざすのですか？今は私と先生しかいないというのに…」

ぴちゃぴちゃとチョコレートを舐めると、さらに茶色いシミが胸にかかる。浴衣を汚しかねないその勢いに、思わず彼はカンナの肩を取った。

「ほら美味しいですよこれ。こんなもの久しぶりに食べていますが…それを、こう！」

バクツ！！！！

そう言葉を紡いだ瞬間、勢いよくバナナを半分噛み切るように食べてしまう。

「カ、カンナ！？」

「やっぱり美味しい…そして先生、私はもう飢えているのです」

残りの部分も食べてしまったカンナはチョコバナナが刺さっていた割りばしをベンチの上に置く。



「先生もそうではないのですか？あれだけ長時間私の隣にいて気が休まる時間はなかったですよね？」

「……………」

「見てください…私のここも渴きを満たしたいと言っています」

本当にもう限界なのだろう、普段堅物で知られる彼女が頬を真っ赤に染めながら浴衣のすそをたくし上げて自分の陰部を見せつけて来る。

そこは既に男を迎え入れる準備ができているどころか洪水状態であり、彼女の興奮状態がさすがに先生にも十二分に伝わってきた。

だからこそ彼はまず

「——ごめんねカンナ」

「は？」

「そうやって誘惑するくらいに私は君を待たせてしまった」

「い、いえ、それは私がただ舞い上がってしまっただけで…」

そう返されてしまうとカンナも困惑してしまう。視線を泳がせて顔を反らそうとする彼女を先生は静かに抱き留めた。

「先生？」

「それじゃあカナナ、どこからがいい？」

静かにささやいてくれる愛しい男の声にカナナはまた自分の股間が濡れるのを感じる。しかし、物事には順番がある。

「…まずは口。そして胸でご奉仕をさせてください」

「分かった。じゃあもうちょっと見えないところに行こうか」

ベンチに置きっぱなしだった割りばしを取ってカバンに入れてから、ふたりは木陰へと進む。

「それでは…失礼します」

木陰に立つ先生の前に躊躇すると、彼女はこの愛する男がたくし上げた浴衣からそり立つ肉棒に顔を近づけた。

「ああ、もう我慢できません。いただきます」



言うが早い、彼女は左手を添えてその隆起したものを口に含むと同時に、右手を使って自らを慰め始めた。

「んん……んっ……じゅぷつれろつくちゅ……っん」

「うう、カンナいきなりそれは……おお……!？」

その指を膣内に出し入れしてぴちゃぴちゃと音を鳴らしながら彼女は奉仕を続ける。その口淫も、普段の彼女からは考えられないような激しいものだ。

「……ぷはっ!だって今日はずっと先生と一緒にいてくださったから……あむう……んん、ぐっ、ん、ん」

「それは嬉しいね。でも私も君と一緒にいられて嬉しかったよ」

「うれひい……ちゅば、ちゅば……んんむむ……」

自分の指を根元まで啜えて犯しながら、カンナは並行して先生の男根を喉奥まで啜えている。

「んん……んぐ、んっ!んむ……っ」

その口淫に思わず先生は腰を浮かせてしまう。しかしカンナは逃がしはしないと彼の腰に手を回し、まるで

飲み込んでしまいそうなくらい吸い付いた。

「くあ……ッ！カ、カンナそれはちよつと……うあ……！！！」

「じゅるっ！じゅぷつれろっん、はあ……！！！」

ペニスにかかる圧迫感からふたたび腰を引いてしまいそうになるが、狂犬と呼ばれた女はやはり逃がさない。自分の膣内に入れた指の動きは大きくなり、口の動きもさらに癡猛になっていく。

「うう……！す、すごいなカンナ……これは確かに……」

「んむうん……ぷはっ！！ああああ……どうです先生？私のフェラチオは？」

「あ、ああ……すごくいいよカンナ」

熱に浮かされたような表情で聞いてくる彼女に先生は素直に感想を述べると、また彼女は奉仕を再開する。

「んん……ん、んぐ、じゅぶ、れろお……」

「くあ……！！カンナ……ッ」

その奉仕に思わず先生は腰を引きそうになってしまいが、それを彼女は許さない。

「ダメですよ先生……まだ私は満足していませんから」

「う、うん……分かった」

そしてまた彼女の激しいフェラチオが始まる。

「はあむ……っ！んっんっんっ！んんん！！」

「は、ああ……っ！」

荒い吐息をあげる先生の腰は小刻みに震え始める。それを見たカンナはラストスパートをかけるように、さらに強く吸い上げた。

「んん！！ん……っはあ！はあ……！？」

「くうう……でも、もう……！！」

「は、はい。遠慮しないで……私も、あむううう……！」

カンナも限界が近いのか再び指を自らの膣内へと出し入れしてリズムカルに動かす。その水音がイヤにはつきりと聞こえてきて、先生の興奮をより高めていく。

——そして、ふたりは同時に限界を迎えた。

「ッ！！カンナ……っ！！」

「ああ、出してください！私の口に……！はむっん、んっんっんうう！」

再び口いっぱい肉棒を咥えた彼女は、その亀頭を吸い上げながら指を膣内で激しく動かす。そして——

「うぁ……！！出るよ……ッ！！」

限界だった先生はそのまま彼女の口内に欲望のたけを解き放った。それに呼応するかのように彼女も絶頂に達すると、腰を浮かせて潮を吹く。

「んんうううう！！！！あはアアアア——————ッッッ！！！！」

「はぁっ、はぁっ……」

「ん……っ……ん……ふう」

自分の喉奥に放たれたそのベタベタとした白濁の液を彼女はゆっくりと飲み干し……